

筑波大学・パリ第13大学共同セミナー「フランス語の文法と語彙のダイナミクス」報告書

日時：2009年9月3日(木)

場所：筑波大学人文社会学系棟 B620

プログラム：

13:30 - 14:30 サラ・メジュリ（パリ第13大学教授）

基調講演 *Traitement automatique des langues*

14:40 - 15:20 高田晴夫（新潟大学人文学部教授）

*Chauffe-biberon* est-il un nom prädicatif ou un nom faisant partie d'une expression figée verbale?

15:20 - 16:00 渡邊淳也（筑波大学人文社会科学研究科准教授）

*L'approximatif en français et en japonais*

16:15 - 16:55 戸部篤（筑波大学人文社会科学研究科 IFERI 研究員）

*L'indicible et l'énonciation*

主催：筑波大学人文社会科学研究科インターファカルティ教育研究イニシアティブ

<発表要旨>

●[基調講演] サラ・メジュリ（パリ第13大学教授） *Traitement automatique des langues*

パリ第13大学、および CNRS (国立科学研究センター) の両方に属する語彙・辞書・情報処理研究所 (*Lexique, dictionnaires, informatique*) での、言語の自動処理の研究について、概要を紹介していただいた。

自動処理において、分析対象の単位は文であると規定する。単語を単位にすると、多義性の問題が出てくるのに対して、文を単位にしてはじめて、意味が安定するからである。文はいくつかの項 (*arguments*) の間の関係を基本とする。文の解析においては、関係を規定する述語 (*prédicats*) をまず同定する。そのあと、述語が要求する項を同定することになる。たとえば、*Luc a mangé une pomme* という文においては、*manger* という述語が *Luc, pomme* というふたつの項をとっていることになる。文から述語、項を抽出したとき、残っている時制、限定詞などの、命題を有効化する要素を現働化詞 (*actualisateurs*) といい、これらを同定することで文の解析が完成する。同じ単語でも、場合によっては異なる機能をもつ。たとえば、*prendre* という動詞は、*prendre un café* においては述語となっているのに対して、*prendre une gifle* においては、*gifle* を動詞化する働きをになうのみであるので、現働化詞とみなされる。

意味を自動処理によって扱う上では、3つの大きな困難がある。多義性、固定表現、推論の問題である。多義性に関しては、おもに述語がどのような属性の項をとっているかを場合分けすることにより対応している。また、固定表現についても、固定表現総体の意味が、どのような属性をもつ項をとるかを観察することにより、その意味の範囲を画定してゆくことを試みている。その際、文脈による曖昧性の除去が最大の困難になる。また、推論については、膨大な事例データを蓄積することで、表現を入力すればそこから導出可能な含意を一覧するシステム (*moteur d'inférence*) の構築を推進している。

このような精密かつ膨大な作業によって達成される言語の自動処理は、きわめて広汎な応用が期待できるものである。また、言語学者が、情報工学を専門とする研究者と部分的に協力するのではなく、はじめから常設の同一組織に属し、つねに協力して研究を推進しているところが語彙・辞書・情報処理研究所の特徴であり、このことが実績をあげるための重要な鍵になっているものと思われる。

(渡邊淳也)

●高田晴夫（新潟大学人文学部教授） *Chauffe-biberon* est-il un nom prädicatif ou un nom faisant partie d'une expression figée verbale?

[要旨] 伝統的な言語学では、次の文：

J'ai l'impression d'avoir passé les 3 mois qui ont suivi la naissance de Jules à ne rien faire que du *chauffe-biberon*. (Danielle Corbin (1992 : 32))

訳：私は Jules の誕生後の3ヶ月というもの“哺乳瓶温め”しかなかったような気がするにおける *chauffe-biberon* は「哺乳瓶温め器」という本来の意味を失い「哺乳瓶温め器を使って哺乳瓶を温める行為」を表しており、そこでは *chauffe-biberon* は<faire du *chauffe-biberon*>という新しい凝結的表現の単なる構成要素と考えることができるだろう。

しかし、モーリス・グロスが構築し、その後ガストン・グロスなどが継承している語彙・文法理論の視点からみると、*chauffe-biberon* は全く異なる取り扱いを受ける。一つは、*chauffe-biberon* が抽象的な意味を表しているとみなして、<faire du *chauffe-biberon*>を<支持動詞+DU+述語名詞>と分析する取り扱いである。もう一つは *chauffe-biberon* はあくまでも具象的な意味を表していると、<述語動詞+DU+項名詞>と分析する取り扱いである。どちらになるかはガストン・グロス (1996 : 55) の操作的基準による。

本発表では、フランス語には「faire + du + 名詞」構造に現れる名詞のうち、*chauffe-biberon* のように形態論的に対応する動詞を持たず、かつ、具象的な意味を表す名詞群をとりあげ、これらの名詞群が、語彙・文法理論では、異質なグループを構成することをアンケート調査により明らかにした。調査の結果は、*chauffe-biberon* は<項名詞>になることが予想される。その他の名詞については以下のようなになる。

faire du *cheval*<馬術を学ぶ>→<述語動詞+DU+項名詞>

faire du *piano*<ピアノを学ぶ>→<述語動詞+DU+項名詞>

faire du *crochet*<編み物をする>→<支持動詞+DU+述語名詞>

faire de la *chaise longue*<折りたたみ長椅子にゆったり寝そべる>→<述語動詞+DU+項名詞>

[参考文献]

D. Corbin (1992) : « Hypothèses sur les frontières de la composition nominale », *Cahiers de Grammaire* N°17

G. Gross (1996) : « Prédicats nominaux et compatibilité aspectuelle », *Langages* 121

(高田晴夫)

### ● 渡邊淳也 (筑波大学人文社会科学研究所准教授) L'approximatif en français et en japonais

[要旨] 近似表現 (approximatif) とは、精確さの度合いが低い言語表現の使用のことをいう。たとえば、「Je gagne 3 545 francs et 50 centimes par mois」(わたしは月収 3545 フラン 50 サンティームです) のようかわりに、「Je gagne 3 500 francs par mois」(わたしは月収 3500 フランです) というように概数を用いる場合がその例としてあげられる。一方、「Je gagne environ 3 500 francs par mois」(わたしは月収おおよそ 3500 フランです) における environ のように、導入される表現が近似表現であることを明示するマーカーも存在する。それをここでは留保表現 (enclosures) とよぶ。たとえば、*presque, à peu près, à peine, pratiquement* (Jayez 1987) ; *pour ainsi dire, une espèce de* (Tamba 1991, p.26) のような表現である。もちろん、留保表現をとまなう場合も、近似表現の1事例としてふくむことができる。

本発表では、フランス語の留保表現 *en quelque sorte* と、日本語の留保表現「ようだ、みたいだ(な)」をとりあげ、それらの機能について考察する。まず、フランス語の *en quelque sorte* については、つぎの (1) のようなタイプの例と (2) のようなタイプの例をそれぞれいくつか分析した。

(1) On comprend que le mendiant soit **en quelque sorte** le pur bourgeois ; car il n'obtient que par un art de demander, par des signes émouvants ; les haillons parlent.

(Alain, *les Arts et les Dieux*)

物乞いはある意味で純然たるブルジョワであることがわかる。というのも、彼らはお願いをする技術と、ひとの心を動かす徴表だけで、金品を得ているからだ。ぼろ着がものをいうのだ。

(2) En surprenant nos voyageurs, nous agissons pour que le temps de transport soit un moment vécu positivement par tous ! **En quelque sorte**, nous réinventons le transport et le rapport entretenu avec nos clients. (Publicité de RATP)

[パリ市交通局の広告] お客さまをおどろかせる企画を打ち出し、わたしたちは移動時間をみ

なさまにとって好ましい時間になるよう行動しています。ある意味で、わたしたちは、交通機関を再発案し、お客さまとの関係を再発案しようとしています。

その結果、*en quelque sorte* は、(1) のようなタイプの例では *le pur bourgeois* のような命題内のひとつの項の使用が近似的なものであることを明示している一方、(2) のようなタイプの例では、文全体の使用が近似的なものであることを明示しており、それらの機能は、作用域がことなるだけで、まったく平行的なものであると結論づけた。また、一見命題内のひとつの項を作用域としているようであっても、発話者が問題となる辞項の選択を行なっているという意味で発話行為に直結していると考えることができ、その意味で文全体にも問題なく適用できるようになっていると考えられる。

日本語の「ようだ、みたいだ (な)」についても、

(3) あの雲は人の顔のようだ。

(4) どうやら雨がふっているようだ。

で見られるように、命題内のひとつの項を対象にすることも、文全体を対象にすることもできるので、*en quelque sorte* と同様のとらえ方が可能であるとした。また、(4) のような推論マーカ―としての「ようだ」の拡張使用として、実際には直接感知した内容をあえて近似的なものとして提示する (5) のような例においては、婉曲をあらわすことになる。

(5) このケーキは甘すぎるようだ。

また、こうした例の「ようだ」からさらに拡張したと思われるのが、「ようだ」の口語的ヴァリエーションである「みたいな」の、つぎのような特異な用法である。

(6) いままで女の子にいい目にあったことがないから、[...] ややこしいこと言いたしたらもう電話しない、みたいな。(高島政宏とのインタビュー、メイナード 2004 に引用)

この例では、仮構的な他者の言説を引用しているかのように発話がなされており、ポリフォニーのひとつの例であると思なすことができる。

以上のように、単一の辞項から、発話行為全般をおおむねの広い作用域までを射程におさめる留保表現の問題は、言語の研究においてきわめて重要な位置を占めるものである。

[参考文献]

Jayez, J. (1987) : « Sémantique et approximation », *Linguisticæ investigationes*, 11, 1, pp.157-196.

メイナード泉子 (2004) : 『談話言語学』くろしお出版。

Raschini, E. (2008) : « Une acte de dénomination par approximation », P. Frath et alii (Eds.) : *Res per nomen*, Editions et Presses universitaires de Reims, pp.248-261.

Reboul, A. (1991) : « Comparaisons littérales, comparaisons non littérales et métaphores », *Travaux neuchâtelois de linguistique*, 17, pp.75-96.

Tamba, I. (1991) : « Un clé pour différencier deux types d'interprétation figurée, métaphorique et métonimique », *Langue française*, 101, pp.26-34.

(渡邊淳也)

### ●戸部篤 (筑波大学人文社会科学研究所 IFERI 研究員) L'indicible et l'énonciation

[要旨] 本発表は、日本語の副詞「まるで」を例に取り上げ、その機能を考察したものである。

まず辞書の記述を確認すると、以下にあげるように、一般に「まるで」には3つの用法が認められている。

用法1: 否定を強調する。「あらゆる点において」

(1) 私は人の言うことなどまるで気にならない。

用法2: 話し手の予想とは異なる異なる結果を強調する。「例外なく」

(2) かつての情緒がまるでなくなってしまった。

用法3: ある対象を典型的な例にたとえる。「言うなれば」

(3) まるで機械のような正確さで、一分の狂いもない。 (『ベネッセ表現読解国語辞典』)

多くの辞書は強調用法を本義と見なすが、それはおそらく語源的な分析によるものである。すなわち「まるで」は、名詞「まる」+派生語尾「で」の構造をしており、「まる」は丸、そこから派生して完全性を表すとされる。したがって、第一義は強調であり、そこから各用法が派生したと考える。

しかし上に引用した辞書の記述にも見られるように、「まるで」は単なる強調ではなく、評価的な価値を伴う表現である。実際、夏目漱石のいくつかの作品を調べてみると、作品ごとに生起数が大きく異なるため、内容や文体に左右されない、中立的な表現だとは考えにくい。

続いて、①否定文における使用、②強調の用法、③比喩、に大別して具体例を観察した。例(4)は否定文における用例である。

(4) 私にはその意味がまるで分からなかった。(『こころ』)

この例において問題なのは、「まったく分からなかった」ことよりむしろ「分かるはずのもの、分かるべきものが分からなかった」ということである。この例に見られる前提との齟齬は、例(5)のような強調の用法においてより明確である。

(5) 若いときはまるで違っていました。(『こころ』)

この用法においては「違う」「同じ」「反対」「無～」という表現と共起する例が多いが、これらは前提との対立(p/p')を含意しうるものである。例(5)においては、若いころから先生はそのような人柄かと思われたが、実はそうではないことが妻から明らかにされた場面である。

一方、比喩の用法においては、前提との対立は見られないように思われる。

(6) まるで携帯に縛られているようだった。(読売新聞 WEB 版、2009 年 8 月 21 日)

この用法においては、「まるで」と呼応して「ようだ」「様子」「みたい」などの表現が用いられることが多く、直喩表現の一形式とも見なしうる。比喩表現は、本来的には異なる要素を用いて叙述を行うものであるから、その意味ではやはり、現実という前提とのずれが存在する。しかしこの場合の「まるで」はどのような機能を担っているのであろうか。

(7) ここで政権交代をしなければ、まるで日本だ。(読売新聞 WEB 版、2009 年 8 月 16 日)

この例においては、「まるで」に呼応する表現を持たないが、比喩表現として成立している。それと同時に、「あるまじき類似」とでも言うべきものが問題にされており、現実とのずれにとどまらない。

以上の観察から、「まるで p」という連鎖の生起は、発話者に結びついた p' の存在をマークすることを指摘した。さらに、前提 p' に対する p のステータスを *indicable* と呼ぶことを提案した。発話者はこの「言い得ないもの」に対して、通常は関係を構築することができない。発話者は「まるで」を介することで言い得ないものにアクセスするができ、そのことが評価的価値を持った強調、否定、比喩といった用法を生じさせるものと考えられる。

#### 引用文献

沖森卓也・中村幸弘編 (2003) 『ベネッセ表現読解国語辞典』、ベネッセ

夏目漱石作品(青空文庫)

WEB 版新聞各紙

(戸部 篤)

## 学生研究交流会 「北アフリカの言語多様性」 報告書

日時： 2009年9月7日(月) 13時-14時30分

場所： 筑波大学人文社会学系棟 B620

発表者： 宮川宗之（筑波大学人文社会科学研究科・大学院生 / IFERI プログラム生）  
青木三郎（筑波大学人文社会科学研究科教授）

共同セミナーに関連する行事として、9月7日(月)には学生研究交流会がもたれた。ここでは IFERI 二期生である宮川宗之プログラム生による研究発表が行われ、その後、青木三郎人文社会科学研究科 文芸・言語専攻教授による IFERI の紹介、並びに今後の共同研究に向けての提言がなされた。宮川宗之プログラム生は研究テーマとして北アフリカ地域におけるフランコフォニーを扱っており、フランコフォニーの概観およびチュニジアにおける現地調査の内容を、実際に現地で収集した録音データ等をあわせてプレゼンテーションを行った。メジュリ教授からはデータの分析の仕方について幾つかの指摘を受け、また教授のご出身がチュニジアであることから、具体的な今後の調査についても有益なアドバイスを頂くことができた。青木教授からもアドバイスを受け、内容に関してはまだ初歩的なものながら今後の発展に期待できる由、大いに励みになるものであった。また会場からはひとりひとりコメントや質問が発せられ、全体として和やかな雰囲気の中、有意義な意見交換がなされるものであった。同時に筑波大学とパリ第 13 大学との今後の友好的な関係構築についても、明るい見通しの感じられるものとなったと言えよう。このように普段は遠く離れた国で異なる研究をする者同士が、いくつかの共通項を見出し一堂に会して意見を交わし、また今後に繋げていけることは、非常に希有ながら価値あることと思われる。

(宮川宗之)